

Mycobacterium marinumを分離同定した2例

所 知都子, 吉多 仁子, 浅田 薫, 浅井 浩次, 北橋 由紀子, 谷川 信子
(大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター)

【目的】M. marinumは従来、魚の病原菌である。ヒトでは、魚や飼育熱帯魚との直接の接触や菌に汚染した水と四肢の擦過傷が接触することにより発症するとされている。最近当検査室で2症例を経験したので報告する。

【症例1】70歳、男性。主訴：右前腕の暗赤色の飛び石上の結節と潰瘍形成。現病歴：平成10年10月転倒し右手首に擦過創を作るも放置。創傷治癒が不良で、同部に隆起性の潰瘍を形成。平成15年10月に別の部位に暗赤色の多発性の結節を生じてきた為当皮膚科を受診。15年前より熱帯魚の飼育歴がある。細菌検査結果：膿液の塗抹は陰性。小川、液体培養とも37℃で陰性、30℃で液体培養は陽性、小川培養で10コロニー発育した。発育速度は14日。集落性状はS型、集落は光発色性を示し 群菌であった。DNA法にてM. marinumと同定した。治療：ミノマイシンと温熱療法が併用され症状は改善した。

【症例2】26歳、男性。主訴：微熱の継続。現病歴：H15年12月、鯛骨が手背にささった後腫瘍出現。H16年1月に同部の切開排膿が行われたが、その後も37℃の微熱

が続く為、6月16日当センター結核外来を受診。職業は魚店の調理師。細菌検査結果：3月19日の膿汁から塗抹陽性
 ガフキー1号、小川培養は、37℃で3コロニーであった。当検査室にて30℃と37℃の発育を比べた結果、30℃で有意に発育した。DNA法を用いM. marinumと同定した。治療：クラリスロマイシンと抗結核薬RFP、EMBが投与され経過観察中である。

【考察】M. marinumの検出には、30℃での発育をみることが有用であった。

連絡先 0729-57-2121(内線2577)